

# 目 次

## 第 1 章

第二言語研究は何を目指すのか (福田純也・矢野雅貴・田村祐)	1
1. はじめに	1
2. 教育実践志向と認知的メカニズム解明志向	2
3. なぜ認知メカニズムの研究が必要なのか	4
4. 認知科学としての第二言語研究をどう進めていくか	6
読書案内	9
コラム「英語教育と SLA と ISLA」(田村祐)	10

## 第 2 章

第二言語研究の抱える根本的問題 (田村祐・福田純也)	13
1. はじめに	13
2. 第二言語研究における「認知メカニズム」の扱い	13
3. 代表的な研究例	17
3.1 言語知識	17
3.2 言語産出	22
4. これまでの L2 研究方略とその問題点	26
4.1 アリストテレス的研究方略とガリレオ的研究方略	26
4.2 傾性概念と理論的概念	27
4.3 概念と観察可能な反応の乖離	30
4.4 概念の無限生成と終わらない「効果」の記述	34
5. おわりに	35
読書案内	37

## 第3章

第二言語研究の抱える問題点の解決法 (福田純也・矢野雅貴)	39
1. はじめに	39
2. 認知システムの認識論的考察	39
2.1. Bhaskar の超越論的实在論と複雑系の科学	39
2.2. アブダクション	43
3. 探究の論理学に基づく L2 研究の振り返りとさらなる注意点	46
4. 認知科学的 L2 研究における言語理論の役割	54
5. おわりに	59
読書案内	62
コラム「本書の採用する科学観・言語観」(福田純也)	63

## 第4章

生成文法に基づく第二言語文法研究 (木村崇是)	65
1. はじめに	66
2. 生成文法の基本的な考え方	66
2.1 生成文法と UG	66
2.2 文法の構造と文の派生	68
3. 生成アプローチの説明範囲と目標	73
4. 生成文法に基づく第二言語メカニズム研究	75
4.1 UG による制約	75
4.2 詳細な文法知識の記述と予測	79
4.3 中間言語と GenSLA	92
4.4 GenSLA における諸仮説と反証可能性問題	97
5. まとめと今後の展望	104
読書案内	106
コラム「素性」(木村崇是)	108

## 第5章

生成文法に基づく言語処理メカニズム研究 (峰見一輝・矢野雅貴).....	111
1. はじめに.....	111
2. 言語処理研究の説明対象と目標.....	112
2.1 言語処理 (language processing) とは?.....	112
2.2 Marr の3つのレベル.....	113
2.3 言語学における3つのレベル.....	115
3. 生成文法に基づく言語処理研究.....	116
3.1 1960年代: 派生による複雑度の理論.....	117
3.2 1970年代: 知覚の方略.....	120
3.3 1980年代: 透明性の仮説.....	122
3.4 2000年代: 「十分よい」文解析.....	124
3.5 2010年代: 手がかりに基づく想起モデル.....	128
3.6 3節のまとめ.....	130
4. 第一・第二言語における言語処理研究.....	131
4.1 前提となる文解析器の処理メカニズム.....	131
4.2 前提となる文法規則.....	133
4.3 第一言語の文解析における「島の制約」.....	134
4.4 第二言語の文解析における「島の制約」.....	136
4.5 まとめと今後の展望.....	137
読書案内.....	140

## 終章

認知システムの解明に向けて (福田純也・矢野雅貴・田村祐).....	141
おわりに.....	147
参考文献.....	149
索引.....	171

## 第1章

# 第二言語研究は何を目指すのか

### 1. はじめに

本書は第二言語 (second language, L2) を対象とし、L2 の様々な現象を生み出す認知システムおよびその習得・処理のメカニズムを科学的に探究する研究分野に焦点を当てたものである。L2 を対象とした研究分野は、第二言語習得 (second language acquisition, SLA) 研究や L2 文処理研究だけでなく、言語教育研究や言語教授法研究、言語評価論など多岐にわたるが、本書が対象とするのは L2 の習得や処理を可能にしている認知システムのメカニズムを解明することを志向したものであり、外国語教育実践の実務的側面への貢献を第一義とするものではない。また想定読者としては、そのような認知科学としての言語システム・メカニズムの探究を志す大学院生や研究者を対象としている。

以下、本章では、本書の対象や目的について説明し、なぜ言語システム・メカニズムの探究という視点が L2 研究に必要なのかを考察し、本書の導入としたい。

## 第2章

---

# 第二言語研究の抱える根本的問題

### 1. はじめに

本章では、これまで行われてきた L2 研究を、その研究観の変遷に触れながら概観し、認知システム・メカニズムの解明を目指すうえで L2 研究が抱える問題点を指摘する。そして、その問題点はいかにして克服されうるかを考察する。L2 研究では様々な研究観が導入され、それに伴って新たな研究アプローチが多く提唱されてきた（これを *epistemological diversity* と呼ぶ：例えば, Ortega, 2012 等）。L2 認知システムを解明しようとするのであれば、新たに提唱された方法論にも同様に批判的な視座をもち、新たな研究観により批判されてきた従来の方法論を批判的に発展させていくといった方法が検討されるべきだということを本章で主張する。

### 2. 第二言語研究における「認知メカニズム」の扱い

Ellis (2008: 6) は、L2 学習者の能力の記述と説明を通して、その背後にある L2 知識を特徴づけることが SLA 研究の目的であると述べている。L2 習得には（他の学問領域と同様）、論理的に説明するのが容易でない現象が溢れている。SLA における多くの本質的な問いも、そのような現象の観察か

## 第3章

---

# 第二言語研究の抱える 問題点の解決法

### 1. はじめに

第2章では、第二言語 (L2) 研究における研究方略を概観し、L2 研究がどのようなものを対象とするかという点に関して述べたのち、L2 研究が克服すべき問題点を述べた。これを受けて本章では、具体的にどのようにすればそれらの問題点が解決できるかについて論じる。

### 2. 認知システムの認識論的考察

認知システムという直接的に観察不可能な対象にどのようにアプローチしていけば良いかということを考えるうえで、過去に関連した考察を行っている科学哲学的な議論を参照したい。

#### 2.1. Bhaskar の超越論的实在論と複雑系の科学

我々の知識が認識に依存することを認めつつ、現象の背後にはそれを成り立たせている構造やメカニズムが経験とは独立して存在しているという立場に、Bhaskar (1975, 2010 など) の「超越論的实在論 (transcendental realism)」

## 第4章

---

# 生成文法に基づく 第二言語文法研究

### 1. はじめに

本章では、言語理論に基づいたL2文法研究の一例として、生成文法 (generative grammar) を理論的基盤とする研究の思考法や研究例を紹介する。すでに簡潔に紹介されているとおり、生成文法研究者は、明示的に定義された概念や道具立てを仮定して、一見不可解な言語現象に対して原因を究明する説明仮説を追求してきた。従来、生成文法で研究対象とされてきたのは主に母語話者の言語知識であったが、1980年代半ば頃に Lydia White らを中心にL2文法研究にも応用されるようになり、L2のメカニズム解明に重要な貢献をしてきた。生成文法を理論的基盤とすることで前章で述べたようなL2研究が抱える問題がすべて解決するわけではなく、本章ではあくまで一言語理論を基盤にしたアプローチを紹介するにすぎない。しかし、本章でみていく現象の多くは、生成文法をはじめとするなんらかの言語理論に基づいてはじめて観察や説明が可能になるものである。また、前章で述べたとおり、生成文法は、理論の明示性を重視して反証可能性の高い仮説を提示してきたため、生成文法を基盤とするL2文法研究における仮説形成においても重要な役割を果たしてきた。本章では、生成文法がL2文法研究において、現象の発見並びに説明仮説の形成のなかでどのように役割を果たしてきたの

## 第5章

---

# 生成文法に基づく 言語処理メカニズム研究

### 1. はじめに

本章では、言語理論、特に生成文法、と言語処理システムとの間にどのような関係性が仮定されていたのかを中心に、これまでの言語処理研究がどのような研究命題に基づいて行われてきたかを概観する。本書の他の章でも述べてきたように、単なる記述的一般化にとどまらない、具体的な処理メカニズムに言及した認知科学研究としての言語処理メカニズム研究がどのような研究であるかを紹介する。

本章の次節以降の内容については以下のとおりである。まず2節では、言語研究の各分野を Marr の3つのレベルに照らし合わせながら、言語処理研究が何を研究対象とし、どのような研究目標をもっているのかを解説する。3節では、文処理研究のうち、特に文理解研究に焦点を当て、これまでの研究を5つの時代に分けて、それぞれの時代でどのような命題をもった研究が行われてきたかを紹介する。4節では、文法と文解析器との関係性を直接的に検証した第一・第二言語における研究事例を紹介する。5節は、本章のまとめと今後の第一・第二言語処理研究の展望を述べる。



## 終章

# 認知システムの解明に向けて

最後に、各章の内容を振り返りながら、本書の総括を行うこととしたい。

まず第1章では、本書の射程を明示するとともに、第二言語を対象とする研究における、基礎科学的研究と、政策科学的・応用科学的研究の区別を述べた。そして、両者は相互に参照的な連携が推奨されつつも異なる研究方法が必要であることを強調した。第二言語習得研究は、特に日本においては英語教育に対する有用性を掲げて発展してきたという経緯もあり(小池, 1994; 村野井, 2006 ほか)、どちらかというところはまでは研究知見の応用可能性を拡張する形で議論が進んできたように思える。我々は教育実践と基礎科学が交わらないものだという考えをもっていないが、その影響が及ぶ範囲に関して限界も認識すべき時にきていると思われる。藤垣(1996)は、メカニズム探究型の研究と、入力(要因)・出力(結果)の測定精度(因果関係の検証)を対象とする機能関連型の研究では、妥当性の要求水準の方向性が異なると述べている。この妥当性水準の方向性と研究の価値観が結びつくことで、特定の領域に属する研究者には、他の領域の研究が、自身の領域の妥当性の要求水準を満たしてしていないため「レベルが低く」みえてしまい、それが領域間のコミュニケーションを阻害することがあると指摘する。本書で指摘した第二言語認知システムを探究する研究のアプローチは、第二言語を対象とした広範囲に及ぶ研究の一領域に限定されるものであることをここに強調したい。第二言語を対象とする研究は、その一つのカテゴリーの中に

## コラム

# 本書の採用する科学観・言語観

## 1. 本書の科学哲学観

本書で紹介するアプローチは広い意味で科学的実在論（戸田山、2015 など）に依拠している。大雑把に言えば、言語のメカニズムを説明するための目に見えない概念は、観察者の認識とは独立に存在し、それに関する事実も認識とは独立に決まっているという立場である。そのうえで我々はあらゆる研究分野の科学的対象となっているものが研究者の認識と独立した実在物であるとは考えない（第2章参照）。したがって、これまでのL2研究で提案されてきたすべての抽象概念が実在論的な存在であったとも考えない。ただし本書では、果たして世界に存在するものや秩序について正しく知ることができるかどうか、という議論には立ち入らない。

第2章では、心的概念は実在論的に存在していなければならない、測定の際にはその概念が観察される変数に因果的に影響を及ぼしていることを示さねばならないと述べた。また、第2章で紹介したように「形成モデル」の選択は、潜在変数に対応する実在を仮定しない操作主義や道具主義的解釈と親和性が高く、対する「反映モデル」の選択は潜在変数に対する実在論の表明であると考え（Borsboom, 2005）。存在論的な部分で、この立場は Hacking (1983) の対象実在論や、Borsboom (Borsboom, Mellenbergh, & Van Heerden, 2004 など) の存在論的実在論と、すべてではないがある程度前提を共有するものである。

対象実在論：科学者たちが実験により、操作したり、介入したりすることができるものは存在するという立場である。代表的な例としては、実験装置によって電子を研究者の予想どおりに射出できたとして、予想どおりの結果を生じたのなら電子は実在すると考える。つまりこの立場において科学的な営みとは、自然に働きかけ、現象を実験的に操作したり、新しい現象を創造したりしながら未知の事実を発見していくことである。

存在論的実在論：妥当性とは「測りたいものが測れているか」という